

ネット使用が中学生のネガティブ感情および攻撃性に与える影響(2)

- 目的別ネット使用のネガティブ効果 -

○高比良美詠子¹・安藤玲子²・坂元章²

(¹メディア教育開発センター,²お茶の水女子大学)

問 題

インターネット(以下、ネット)は、非常に便利な道具であり、日常生活において頻繁に使用されている。しかし、ネットの使用は、人の心理面にネガティブな影響を及ぼすという指摘もある。例えば、抑うつ症状の悪化や、攻撃的な考え方や行動の増加などが、その代表的なものである(Kraut et al., 1998; Wallace, 1999)。

このようなネガティブな影響は、ネットの使用に習熟していくに従い消滅していくという知見もあるが(Kraut et al., 2002; Walther, 1992) まだ発達途上にあり、成人に比べ認知能力等に制約のある子どもの場合、ネット使用の影響が強く出る可能性もある。例えば、小学生を対象とした安藤・高比良・坂元(2003)の研究では、ネットの使用量が多い児童ほど、抑うつ症状や攻撃性の一部が高くなるという結果が見られている。

そこで筆者らは、子どもに対するネット使用の影響をさらに詳しく検討していくために、中学生を対象としたパネル調査を行った。本稿では、ネット使用が、抑うつ感情を含むネガティブ感情と、攻撃性に及ぼす影響について検討した結果を報告する(ネット使用が孤独感とソーシャルサポートに与える影響については、安藤らによる別稿参照)。

方 法

調査対象

神奈川県内の公立中学校3校の2年生に2波のパネル調査を実施し、両時点で回答があった338名(男子155、女子183)を分析の対象とした。

調査項目

目的別ネット使用量： 授業、宿題や勉強、好きなことを調べる、ネットで知り合った人とやりとりする、家族や友だちとやりとりする、新しい友達づくり、のそれぞれのためにネットを使用した時間(1週間の合計時間)を、「やって

いない」から「3時間以上」の7件法で尋ねた(併せて測定したツール別ネット使用量の結果は、本年度の健康心理学会で高比良らが報告した)。

ネガティブ感情：抑うつ感情、怒り、不安、無気力について尋ねる各2項目からなる尺度を作成した。 α 係数は.82、.80、.76、.66であった。

攻撃性：日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙(安藤ら, 1999)の4つの下位尺度(短気、敵意、身体的攻撃、言語的攻撃)を用いた。なお、この尺度の「言語的攻撃」は、「自己主張」を主に測定するものとなっているので、これとは別に、より攻撃性の高い言語行動である「言い負かし」についても併せて測定した(5項目の尺度を作成して利用)。 α 係数は.75、.67、.72、.57、.58であった。

結 果

目的別ネット使用量

1時点目における目的別ネット使用量の平均値と標準偏差を表1に示した。

表1 目的別ネット使用量の平均値と標準偏差

	<i>M</i>	<i>SD</i>
授業	1.56	1.45
宿題や勉強	0.99	1.46
好きなことを調べる	2.56	2.10
やりとり(ネット友人)	0.47	1.35
やりとり(オフ友人)	0.50	1.29
友だち作り	0.35	1.13

ネット使用がネガティブ感情に与える影響

構造方程式モデル分析により、ネット使用が、ネガティブ感情に与える影響について検討した。分析モデルには交差遅れ効果モデルを用いた。1時点目のネット使用量から2時点目のネガティブ感情へのパスが有意な正(負)の効果を持つなら、ネット使用の増加によりネガティブ感情が上昇(低下)するという因果関係が推定される(図1)。

分析の結果、友だち作りのためのネット使用が多いほど、怒り感情が高まる傾向にあった(表2)。

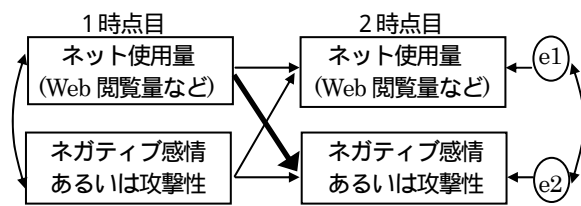


図1 交差遅れ効果モデル(eは誤差)

ネット使用が攻撃性に与える影響

上記と同様のモデルにより、ネット使用が攻撃性に与える影響について検討した(図1)。

分析の結果、新しい友達作りや、ネットで知り合った人とのやりとりのためにネットを使用する機会が多いほど、攻撃性の認知的側面である「敵意」が高まっていた。一方、授業での使用が多いほど、「敵意」が低下する傾向がみられた(表2)。

考 察

本研究において、ネット使用がネガティブ感情全般に及ぼす影響について検討したところ、小学生で見られたようなネガティブな影響はほとんど見られなかった。ネガティブな影響の消失が、加齢に起因するものかどうかを確認するためには、今後、高校生を対象とした研究などが必要だろう。

続いて、ネット使用が攻撃性に及ぼす影響について検討したところ、ネットで知り合った友人とのやりとりや、新しい友達作りのためにネットを使用している中学生ほど、他者に対する否定的な信念や態度である「敵意」が高まっていることが明らかになった。本研究で得られた因果係数はあまり大きなものではなく、攻撃性への影響は必ずしも強いものとはいえないが、小学生においても、新しい友達づくりのためにネットを使用することで敵意が高まるという同様の結果が見られており(安藤ら, 2003) 注目に値する点だといえる。

ネット上でやりとりされる情報は、主に文字情報に限られるため、相手の真意を正確に読み取るための能力が対面場面以上に必要だといえる。そのため、このような能力が不十分な状態で、ネットを中心としたコミュニケーションを行った場合、相手との間に誤解が生じやすくなり、結果的に、他者に対する敵意が上昇してしまう可能性がある。

ただし、授業内でのネット使用では、逆に敵意が減少する傾向がみられており、ネット上のコミュニケーションのすべてが、敵意を高める方向に働くわけではない。授業内での使用のように、対面上のフォローが可能な場面であれば、ネットの使用は、新たなコミュニケーションチャネルを1つ増やすことに繋がるだろう。そして、今まで以上に綿密なコミュニケーションが可能になった結果、他者に対する敵意が減少するのかもしれない。

このように、ネット上のコミュニケーションは、使い次第で、ポジティブ・ネガティブ両面の影響をもたらす可能性がある。ネットの特徴をよく踏まえながら、それを上手に使っていくための方策を考えていくことが重要であると思われる。

引用文献

- 安藤玲子・高比良美詠子・坂元章 2003 ネット使用が精神的健康および社会的不適応に与える影響(2) 日本社会心理学会第44回大会発表論文集, 621-622.
 安藤明人ら 1999 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙(BAQ)の作成と妥当性、信頼性の検討 心理学研究, 70, 384-392.
 Kraut, R., et al. 1998 Internet paradox: A social technology that reduces social involvement and psychological well-being? *American Psychologist*, 53, 1017-1031.
 Kraut, R., et al. 2002 Internet paradox revisited. *Journal of Social Issues*, 58, 49-74.
 Wallace, P. 1999 *The psychology of the Internet*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
 Walther, J. B. 1992 Interpersonal effects in computer-mediated interaction: A relational perspective. *Communication Research*, 19, 52-90.

表2 目的別ネット使用量からネガティブ感情および攻撃性への因果関係

	攻撃性					ネガティブ感情			
	短気	敵意	身体攻撃	主張	言い負かし	抑うつ	怒り	不安	無気力
授業	-	-.08†	-	-	-	-	-	-	-
勉強と宿題	-	-	-	-	-	-	-	-	-
好きなことを調べる	-	-	-	-	-	-	-	-	-
やりとり(ネット友人)	-	.09*	-	-	-	-	-	-	-
やりとり(オフ友人)	-	-	-	-	-	-	-	-	-
友だち作り	-	.09*	-	-	-	-	.07†	-	-

注：ここでは、有意な効果・傾向がみられた場合の数値のみを示した。* $p<.05$, † $p<.10$